

松風館十勝碑林建立十五周年記念事業

河相君推と松風館十勝

菅茶山と中條村の文人たち

菅茶山顕彰会

発刊にあたって

菅茶山顕彰会 会長 藤田卓三

福山市神辺町西中条山田谷に「松風館十勝碑林」を建立して十五年余が経過した。碑林のルーツ「松風館十勝」は「西中條村史」（金尾直樹 明治十五年）に銘記されながら、史跡が消滅している故か、地元で普遍化されていなかった。そこで、河相君推の業績顕彰と菅茶山の足跡を印すために本会が主導して事業を起こしたものである。この度、十五周年記念事業として、「十勝碑林」に説明板設置と駐車場新設並びに記念誌「河相君推と松風館十勝」や「栞」の発行等を二年計画で進めていた。

江戸時代後期に「菅君、詩を以て世に鳴る」と評された菅茶山が足繁く通った天領中條はこの時期はまさしく「大輪の文化の華」が開いたようであっただろう。

河相君推は豪農で酒造業を営み、書画骨董の類の蒐集家、和歌を嗜む風流人でもあった。屋敷内に客殿「松風館」を建て、その傍らに池亭を配するとともに山田谷全体を巡る「松風館十勝」を設けた。

茶山は君推と遠縁にあたる気安さもあって、廉塾を訪れる多くの文人たち（頼兄弟・西山拙斎など）を頻繁にこの松風館や近くの古刹遍照寺の詩会、月見の宴などに案内している。一時期廉塾都講として滞在した頼山陽も招かれ詩を詠んでいる。

さらには、中條村の文人たち、河相子蘭・松井子瑠・篁大道や大空上人・乗如上人なども折に触れての詩会・書画会などに招待され、多くの詩を残している。

菅茶山顕彰会が、再度「河相君推と松風館」についての史実を検証すると共に、菅茶山の中條村への足跡を明らかにして、小冊子を作成する意義は、後世に伝える温故知新の心であり、「十勝碑林」を建てた先輩たちへの謝恩でもある。さらには、中条地区の「地域おこし」の一助になることを希望してやまない。

結びに、今回の特別プロジェクト事業等に過分の助成を賜った一般財団法人義倉並びに高橋孝一様ご遺族に対し、衷心よりお礼申し上げます。

令和四年一月吉日



菅茶山ゆかりの中条の寺院と史跡



遍照寺山門鐘楼



寒水寺本堂



廣山寺本堂



圓通寺全景



象山献燈と地神様



中条高居に建つ茶山詩碑



河相君推の墓



唯一現存する迎碧墩碑



大空上人招魂碑

目次

発刊にあたって

菅茶山ゆかりの中条の寺院と史跡

松風館十勝碑林と十勝碑

一 松風館十勝碑林について

(一) 除幕の式典

(二) 建立された石碑

(三) 謎であった松風館十勝名が明らかになった経緯

(四) 「衝立」から判ったこと

(五) 十勝名を墨書した人物と菅茶山の関係

(六) 十勝碑完成までに約十六年の歳月

(七) 松風館と十勝はどのように配置されたのか

二 河相君推と河相家について

(一) 河相君推

(二) 象山献燈の建立

(三) 河相家と本荘屋菅波家・菅茶山の関係

(四) 君推の子どもと絶家

(五) 土居河相家墓域と河相君推の墓

三 松風館（河相君推宅）で詠まれた詩

(一) 天明五年の作 (二) 天明八年の作 (三) 寛政二年の作 (四) 寛政四年の作

(五) 寛政五年の作 (六) 寛政七年の作 (七) 寛政九年の作 (八) 文化六年の作

(九) 文化八年頼山陽作 (十) 菅茶山ゆかりの中条地図

菅茶山と中條村

一 菅茶山と文人サロン「中條」

(一) 遍照寺と大空上人

(二) 河相子蘭

(三) 松井子璐

ページ

5

14

17

23

(四) 篁大道

二 遍照寺を訪ねたり、中條の詩友と詠んだ詩

(一) 安永二年～三年の作 (二) 安永七年の作 (三) 天明二年の作

(四) 天明三年の作 (五) 天明四年の作 (六) 天明五年の作 (七) 天明六年の作

(八) 天明七年の作 (九) 寛政十年の作 (十) 文化七年以前の作

菅茶山が往来した中條路

一 中條往還

二 往来路上で詠んだ詩

(一) 天明二年以前の作 (二) 天明四年の作 (三) 天明六年の作

(四) 寛政五年の作 (五) 寛政十一年の作 (六) 文化七年の作

(七) 文化九年から十年の作 (八) 文政六年頃の作

仮説「松風館十勝は邸内及び山田谷一帯に設置された」

(一) 詩や文献より推察する (二) 地籍図と現地調査、古老からの聞き取り

で推察する (三) 十勝の位置を推定する (四) 松風館十勝推定地図

記録「松風館十勝碑林建立」

一 松風館十勝碑林除幕式典

二 松風館十勝碑林祝賀会

三 松風館十勝碑林建立の経緯

四 松風館十勝碑林建立十五周年記念事業

付表 漢詩索引「茶山・君推年表」

参考文献

終りに

編集・発行

中条村の表記について

菅茶山の時代については「中條」、
現在での表記は「中条」とした。

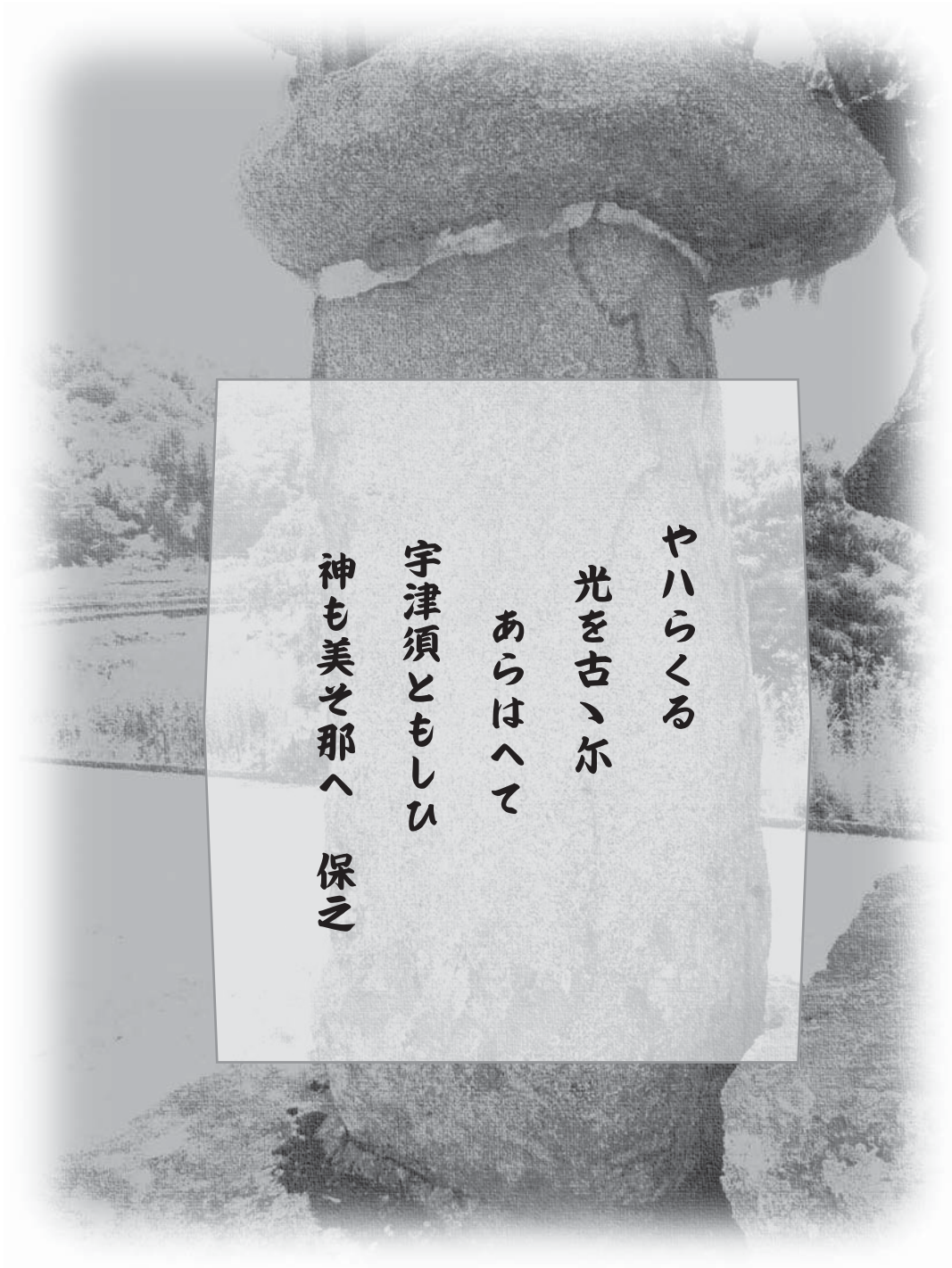
25

38

48

52

62



やハらくる

光を古ゝ尔

あらはへて

宇津須ともしひ

神も美そ那へ 保之

象山献燈の裏面に刻された
河相君推の和歌

松風館十勝碑林建立と十勝碑

一 松風館十勝碑林について

(一) 除幕の式典

平成十八年(二〇〇六)二月二日 福山市神辺町西中条山田谷内の「象山 松風館」西の一角に建設が進められていた「松風館十勝碑林」の除幕式が盛大に執り行われた。式典には松岡宏道広島県議会議員様、佐藤秀毅神辺町長様(代理)、藤原平一般財団法人義倉理事長様をはじめ地域の町内会長様や菅茶山顕彰会の役員など多くの参加のもと完成を祝った。その様子は『菅茶山顕彰会会報第十六号』で報じられた。(写真は会報から転載)



開会式の様子



各碑の除幕

菅茶山顕彰会会長高橋孝一氏はそこで次のように述べている。

漢詩人茶山について、儒者亀田鵬斎をして「菅君、詩を以て世に鳴る」と言わしめたように、当時の著名な儒者たちの金石文が、このように神辺の地にもたらされた意義は大きい。

昨年、この史跡を顕彰するため、松風館記念碑建立を発起したところ

(二)

① 建立された石碑

注 除幕式の詳細は後述の「記録 松風館十勝碑林建立」参照

顕彰会役員ならびに有志の方の格別のご理解とご協賛をいただき、今回ゆかりの地に、三基の松風館関係碑と十基の十勝碑、三基の詩碑が建立されました。そして、この庭園を中国の「西安碑林」に倣って、「松風館十勝碑林」と命名しました。

ご協力、ご尽力をいただいた関係各位に、深く敬意と感謝の意を表するとともに、この「碑林」が茶山文化を偲ぶよすがとなり、福山市との合併記念として、神辺の新たな史跡名所となることを願うものである。

石碑「松風館十勝」
建立菅茶山顕彰会



石碑「松風館跡」
建立神辺町長 佐藤秀毅



石碑裏面 「河相君推と松風館」

㊦ 十勝碑と刻された人物



娛論亭
菅茶山



鳥語洞
赤崎彦禮



鳴玉橋
菅 恥庵



棟棠橋
倉成龍渚



松風館
頼 杏坪



迎碧墩
柴野栗山



垂白棚
紫 源



魚樂梁
龜田鵬斎



紅於徑
岩瀬華沼



浸翠池
山本北山

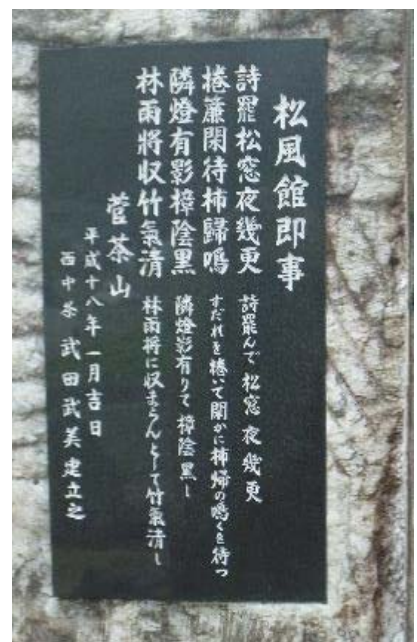
㊦ 松風館を詠んだ詩碑



詩碑「河相保之松風館同菅禮卿賦」
建立 神辺町教育長 重政義宣



詩碑「所見」 建立 松井義典



詩碑「松風館即事」
建立 武田武美

(三) 謎であった松風館十勝名が明らかになった経緯

松風館十勝とはどのようなものであったか長年不明であった。

①「西中條村史」(金尾直樹著、明治十五年出版)に次のようにある。

河相周次郎ハ山田谷ニテ當時村中有名ノ富家也 同人實名保之ト云。備中後月郡井原村ノ産、嘗テ和歌ヲ嗜ム、讀ム歌ノ中ニ「香ひくる風を枝折にわけ入りて問はや梅の花の山里」ト云エルハ墓碑ニ刻セリ。菅晋帥ト金蘭ノ交アリ。同人庭前ニ茶翁ノ直筆ニテ常夜灯ノ銘アリ、又邸内假山ノ内十勝石標アリシ、一ハ柴栗山先生ノ銘也、曰「迎碧墩」該石ニ茶山先生ノ記アリ、「迎碧墩、右柴博士栗山之書、松風館十勝石標之一也、文化甲子余在江戸、爲主人請之、原本有二印、日柴邦彦、日柴彦輔、以字細不刊、乙丑正月、晋帥」ト。今猶存ス。又頼翁潤筆ノ額アリ、松風館ト云フ。松風館十勝中、鳴玉橋ヲ咏スル西山拙齋ノ歌アリ「柴橋を掛て幾世も住ぬべし玉を鳴せる松の下水」。(下略)

『備後史談十六卷十号』より引用

「中條村史」から次のことがわかる

○十勝は邸内及び假山に設置されていたこと。

○石標の一つは柴野栗山の銘であること。

石碑には、茶山が文化元年(一八〇四)江戸滞在時に、主人の為に書いてもらったこと。原本には柴邦彦と柴彦輔の二つの印が押してある。

○頼翁潤筆の額があり「松風館」と記してあること。

○松風館十勝中の「鳴玉橋」を西山拙齋が和歌を詠んでいること。

②「松風館十勝」の原本が見つかる

それまで十勝の内「松風館」「迎碧墩」「鳴玉橋」しか明らかにならなかった「十勝名」の全てが、猪原薫一、濱本鶴賓両氏の調査で明らかにされ、昭和十五年(一九四〇)『備後史談十六卷第十号』で発表された。

それによれば、「紙本墨書衝立」に菅茶山書ほか九勝の名称と墨書名がある原本であった。この衝立は府中市木村家所蔵で大幅に表装されたものであった。この木村家は、菅茶山の弟子木村雅寿の縁戚阿賀谷木村家である。

平成二十二年(二〇一〇)「菅茶山ゆかりの拓本展」(菅茶山記念館)が開催され、その中で「紙本墨書衝立」が紹介された。この衝立は旧千葉家所蔵(現在安芸郡海田町織田スクエア所有)のものであるが、『備後史談十六卷第十号』で発表された仕立(衝立)の記述と同じである。所在変更の時期等は不明とのことである。衝立の書は次頁のとおりである(原文は漢文)

(四) 「衝立」からわかったこと

① 四勝は四角形木柱に刻まれ、各勝を案内するものである。

「松風館」	頼杏坪(広島藩儒、頼山陽の叔父)
「棧棠橋」 <small>ていとうきょう</small>	倉成龍渚(豊前中津藩儒、能書家)
「鳥語澗」 <small>ちようごかん</small>	赤崎彦禮(薩摩藩儒者)
「鳴玉橋」 <small>めいぎよくきょう</small>	菅恥庵(茶山末弟)
四勝名の下に記文	永富充國(肥前国五島藩儒)

記文に「池亭四勝標柱と為す 蓋し以て其方なるを知る也」とあり、四勝は一本の木柱に記された四角柱で、四勝の方向を示していた。「寛政戊午竹酔日」とあり、寛政十年（一七九八）五月十三日に記される。



<p>松風館</p>	<p>棟棠橋</p>	<p>鳥語澗</p>	<p>鳴玉橋</p>	<p>迎碧墩</p> <p>右柴博士の書、園中十勝石標の一つなり。 文化甲子余江戸に在り、主人の爲に之を請う。 乙丑鳥語澗の北岸に刻立す、此れ其の原本と云う。 菅帥識す</p>	<p>浸翠池</p> <p>魚樂梁</p> <p>鵬齋興書</p>	<p>紅於徑</p> <p>垂白棚</p> <p>紫源</p>
<p>此れ河相君推の池亭四勝標柱と為す 蓋し以て其方なるを知る也。以て菅処士 茶山、客を愛し四方より來問の者多き也。 因て有名なる士をして各題を請う。 其の一つ 棟棠橋 は中津倉成善司、 鳥語澗 薩摩赤崎彦禮、 松風館 安藝頼千禰 鳴玉橋 則ち処士弟菅信卿也。 余後に命至りて其の事を記す、 余は長門永充國なり、 時に寛政戊午竹酔日</p>				<p>是れ松風館諸勝標 以て諸老宿書袿装す 以て弃て別つ娯論亭有り 其扁則ち余書する所 併せて十勝と為す。 原字若しくは摹搨を此に 副うと云う 搨無し</p>	<p>菅帥識す 文化己巳 嘉平月十日</p>	

② 「迎碧墩」 柴野栗山（讃岐の人、昌平塾教授）

衝立の記文から文化甲子（文化元年一八〇四）、江戸で茶山が主人（河相君推）のために柴野栗山に依頼して書かれたことがわかる。さらに、乙丑（文化二年）鳥語濶の北岸に建立したと記している。現存する石碑「迎碧墩」には次のように刻してある。

迎碧墩 柴栗山書・菅茶山書
右柴博士栗山之書松風館十勝
石標之一也文化甲子余在江戸
為主人請之原本在二印曰柴邦
彦曰柴彦輔以字細不刊
乙丑正月 晋帥



現存する迎碧墩碑

この「迎碧墩」の石標は現存する唯一のもので、松風館跡から場所を東に変えた中条山田地区の親戚筋の庭に建っている。

石碑は、「文化二年（一八〇五）一月に刻まれた」とあり、池亭四勝の木標より七年後に刻まれたとわかる。

③ 「浸翠池」 山本北山（江戸の儒者）

印中に「信有」とあり、名を信有といい山本北山とわかる。

④ 「紅於徑」 岩瀬華沼（肥前島原藩儒）

印中に「行言」とあり、名を行言といい岩瀬華沼とわかる。

⑤ 「魚樂梁」 亀田鵬斎（江戸の儒者）

「鵬斎興書」とあり、亀田鵬斎の書であることがわかる。衝立の写真

ではよくわからないが、双釣（注）で書かれている。鵬斎は彫刻することがわかっていたので、別に「魚樂梁」の文字を書き、所定の紙に双釣で書き写して自署したものと考えられる。

注 筆跡などを写し取る時、中を白のままにしてへりだけを二重文字にして写し取ること。

⑥ 「垂白棚」 紫源（不明）

墨書に「紫源」と署名しているが、人物像は不明である。

⑦ 「娛論亭」 菅茶山

これは原本も拓本もない。その理由が「衝立」の余白（左下）に直接書かれている。これによれば、「娛論亭」には茶山の書による木製扁額が掲げてあったらしい。茶山はその扁額に直接書いたので、原本はなく、またその扁額も未だ彫刻されていないので拓本もない」と文化己巳六年（一八〇九）十二月十日に書いていることがわかる。

⑤ 十勝名を墨書した人物と菅茶山との関係

① 倉成龍渚（一七四八～一八一三） 名 至、通称 善司

豊前中津藩儒で藩校進脩館の教授となり、江戸詰となる。『藤井暮庵先生行状略記』に「寛政八年（一七九六）九月十三日 豊前中津藩儒倉成先生に拝謁、詩を呈す」とあり、茶山を訪ねている。この訪問の時、請われて墨書したと思われる。

② 赤崎彦禮（一七三九～一八〇二） 通称 源助、字 彦禮、号 海門

薩摩藩儒で藩主に重用される。頼春水と親交があり、その縁で藩主の

参勤交代に扈從した際、茶山を再三訪ねている。寛政九年、十年に立ち寄ったことが『藤井暮庵先生行状略記』に残っている。この訪問時に墨書してもらったと思われる。

③ 頼杏坪(一七五六～一八三四) 通称 万四郎、字 千祺

頼兄弟(春水・春風)の末弟で頼山陽の叔父にあたる。広島藩儒となり三次・恵蘇郡代官を務める。茶山宅を再三訪ねており、書の交換もするなど親しく交流している。茶山から墓碑銘撰書を依頼されている。

寛政九年(一七九七)、藩主の世子の侍読となり、頼山陽の江戸留学に付き添う形で茶山を訪問している。また寛政十年、頼山陽が帰郷する際にも同行し茶山を訪ねている。墨書はこの時期になされたものと思われる。

④ 菅恥庵(一七六八～一八〇〇) 通称 圭二、字 信卿

茶山の末弟。家業を茶山から受け継ぐ。寛政十二年(一八〇〇)京都で客死する。寛政九年(一七九七)八月に長崎へ向かうので、それまでに墨書したと思われる。

⑤ 永富充国(一八〇一) 通称 数馬、名 亀山

寛政十年(一七九八)四月に茶山を訪ねる。『暮庵先生行状略記』に「先生(充国)ハ長門ノ人、肥前五島藩儒トナル。今致仕シテ上國ニ遊ブト云」とある。充国は約一年間滞在し、講義もしている。

松風館の標柱に四人の墨書者名を記したのはこの頃であると推察される。

⑥ 柴野栗山(一七三六～一八〇七) 名 邦彦、字 彦輔

西山拙斎や頼春水と親交があり、茶山とも早い時期から交流がある。茶山は文化元年(一八〇四)藩主の命により江戸出府し六月末に駿河

台の私邸を訪ねている。また、帰国の迫った七月、栗山の屋敷を借りて「饒筵の会」を開いている。この江戸出府の際、墨書してもらったのである。

* 江戸に向かったのは、文化元年一月二十一日であった。だが、茶山日記には「二十一日発程、別に日記有り」と書かれているだけで、その「日記」は今日失われており詳細は不明である。

⑦ 山本北山(一七五二～一八一二) 名 信有、通称 喜六
江戸の御家人の子で、塾「奚疑館」を創る。「寛政異学の禁」には亀田鵬齋らと強く反対した。

文化元年(一八〇四)茶山の江戸出府の時、会ったという記録を見つけることはできなかったが、北山は「叙情的な宋詩こそ詩人自らの個性を表現しえる最適な漢詩スタイルであると主張した」ことから、茶山の詩風と一致しており、何らかの交流の際、揮毫を依頼したと推察できる。

⑧ 岩瀬華沼(一七三二～一八一〇) 名 行言、字 子言

肥前島原藩儒。藩校稽古館けいこかんの教授。柴野栗山、頼杏坪らと親交があった。文化元年の栗山堂の詩宴にも参加しており、茶山との交流があったと思われる。江戸出府の際、墨書してもらったと考えられる。

⑨ 亀田鵬齋(一七五二～一八二六) 名 翼、字 国南

江戸の儒者。私塾には旗本や御家人の子弟が多く集まっていたが、松平定信による「寛政異学の禁」が發布されると、山本北山らと強く反対したが、門弟の多くは去ってしまったという。

後に廉塾の都講となる北條霞亭が鵬齋の塾に寄寓していたが、茶山が鵬齋と面識を持ったのは、二度目の出府時である。

「文化十一年(一八一四)九月、百川楼で開かれた書画会に遅れて向か

った茶山と早く辞した鵬齋が路上で偶然に出会った」と日記に記している。(谷文晁画「茶山鵬齋日本橋邂逅圖」は有名である)

十勝中の「魚樂梁」を墨書してもらったのもこの時期であろう。

⑩ 紫源

この人物については茶山との交流は不明であり、今後の研究に期待したい。

(六) 十勝碑完成までに約十六年の歳月

○ 四勝の標柱「松風館」「棟棠橋」「鳥語澗」「鳴玉橋」の設置は寛政十年(二七九八)。永富充国の記文により確定される。

○ 「浸翠池」「紅於徑」「魚樂梁」「垂白棚」の設置は文化二年(一八〇五)と思われる。

茶山の帰郷は文化元年(一八〇四)十一月五日で実際に建立されたのは文化二年であろう。現存する「迎碧墩」の石柱に刻まれていることから確定される。

○ 「娛論亭」の墨書は文化六年(一八〇九)には書かれていた。

「衝立」の余白部に書かれた内容からして、以前から木製扁額に書かれていた。茶山は「まだ彫刻もされていないので、拓本もない」と不平を洩らしている。

○ 「魚樂梁」の書は茶山の二度目の出府の時、揮毫してもらった。

鵬齋との初対面は文化十一年(一八一三)九月であり、帰国は文化十二年三月末なので、刻まれたのは文化十二年であろう。

以上の事から、松風館十勝碑は一度に建立されたのではなく、完成す

るまでに約十六年の歳月を要したと思われる。

最近得た情報として、茶山の日記「蝸角擣杵」かかくとうこつに次の記録がある。

「享和三年三月十五日 君推来謝転致四勝題字」

享和三年(一八〇三)には既に四勝があったことが判明するが、記述の四標名や「謝転致」の意味が不明である。「転致」は移転させたのか、石碑に文字を刻んだのかなどは不明である。今後の解明に期待したい。

(七) 松風館と十勝はどのように配置されたのか

現在松風館跡と思われる広大な土地は空き地になり、その面影はない。近くの住民に尋ねても、詳しい話を聞くことはできず、屋敷内に古井戸があり、現在も「おいしいお水が出る」という話しか聞けなかった。

山田谷は全体的に余り人の手が加わっておらず、かつての地形を保っていると思われる。ただ、灌漑用の新池が昭和十五年(一九四〇)に畑を掘削して作られた。最奥部の三池が埋め立てられ、現在は運動広場になっている。

① 位置が確認できる記述が一つだけ存在する。

先の「衝立」の記述に次のようにある

迎 碧 墩
右柴博士の書、園中十勝石標の一つなり。
(中略) 乙丑鳥語澗の北岸に刻立す、(後略)

これにより、石碑「迎碧墩」が石碑「鳥語澗」の北岸に建てられたことがわかる。

② 現在では、訪れた人々の詩や和歌から推察するしかない。松風館と十勝の様子が推察できる詩を幾首か取り上げる。

松風館即事 黄葉夕陽村舎詩 後一―二十一

箱藏古畫案堆書	箱に古画を蔵し	案に書を堆くす
却是尋常百姓廬	却つて是れ尋常	百姓の廬
爨婢摘萃呼病鹿	爨婢 萃を摘んで	病鹿を呼び
園奴激水引遊魚	園奴 水を激して	遊魚を引く
籟長松頂風收後	籟は長し	松頂風収まって後
流淨崑根凍解初	流れは淨し	崑根凍を解くるの初め
奴婢亦能知愛客	奴婢 亦た	能く客を愛するを知り
不妨騎馬到階段	妨げず	馬に騎りて 階段に到るを

案 机の事。尋常 当たり前。爨婢 爨は飯を炊く女衆。萃 うきくさ、よもぎ。激 さえぎる。籟 笛、松風のことを松籟。崑 崑岩。階段 階段

(大意)

昔の書画骨董が箱に収まっていて、机には書物が堆く積み上げられている。普通の百姓の家にそのようなものがあるのだから、まったく意外で松風館は素晴らしい。女衆がヨモギを摘んで、飼っている病気の鹿をかわいがっている。男衆は水を堰き止めて魚を飼っている。松の頂の風が収まった後も、松風の音が耳に残っている。谷川のきれいな流れが凍っていたのが解け始めた。男衆も女衆も訪れる客人をもてなす術を心得ている。馬で階前に乗り付けると喜んで迎えてくれた。

河相保之松風館同菅禮卿賦 春水

長松之下故人家	長松の下	故人家
鳴玉溪流不覺譁	鳴玉の溪流	譁しきを覚えず
傳杯更愛幽香度	杯を伝え	更に愛す 幽香の度るを
屋角微風橘柚花	屋角の微風	橘柚の花

故人 古くからの友、旧友。譁 喧しい、耳障りな。幽香 かすかな、ほのかな。橘柚 みかんとゆず、ミカン類の称。

(大意)

大きな松の木の下に、古くからの友の家がある。屋舎にあがると玉を鳴らすような泉水がちよろちよろ流れているが耳障りにはならず、快い音色を響かせている。酒を酌み交わしていると、どこからか、ほのぼのとした得も言われぬ香が鼻をくすぐる。

さて、何の匂いだらう。家の屋敷の隅の方から吹く風にのってくる。ああ、橘の花の匂いだな。

* この詩で頼春水は「故人の家」としているところを見ると、君推と以前から交流があったことが窺える。

* 頼春水は頼家兄弟の長男。三男春風は竹原で医師。四男杏坪は広島藩儒として活躍。茶山と頼家とは家族ぐるみの付き合い。(次男は夭死)



松風館即事 黄葉夕陽村舎詩 前三一十五

詩罷松窓夜幾更
 捲簾閑待柿歸鳴
 隣燈有影樟陰黒
 林雨將收竹氣清

詩 罷やんで 松窓 夜幾更よいくこう
 簾すだれ を捲まいて 閑しずかに柿歸しきの鳴くを待つ
 隣燈りんとう 影有りて 樟陰しょういん 黒し
 林雨りんう 將まさに収おさまらんとして竹氣清ちくきし

柿歸 ホトトギス。 樟 クスの木。

(大意)

詩を吟じ終わって窓を見ると、枝ぶりのいい松が見え、夜もかなり更けているようだ。簾をまいて静かにホトトギスが鳴くのを待っている。隣の部屋の行灯あんどんの光が、楠の木をぼんやり照らしている。庭の林に降る雨もようやくあがろうとしており、竹藪から清々しい気が感じられる。



詩碑 松風館即事

③ 残された和歌より

○ 鳴玉橋ヲ咏スル西山拙斎の和歌 (『中條村史』より)

「柴橋を掛けて幾世も住ぬべし玉を鳴せる松の下水」。

○ 菅茶山の和歌 (『菅茶山の詠歌』より)

寛政四年(一七九二) 松風館庭鳴玉橋

「すむ人の友としならば谷水のとむも深き心ならまし」

④ これらの詩や和歌より、想像できること

○ 松風館は客殿(別荘)として建てられたものであること。

○ 多くの書画を収集し、和歌に通じた文化人であったこと。

○ 邸内及び周辺には客にもてなすため、養魚場があり、鹿なども飼っていたこと。

○ 松風館邸内に溪流が引き込んであり、その上に柴橋(木製の橋)が架かっていたこと。

○ 屋敷周辺や邸内に大きな松や樟、竹林があり、さらに柑橘系の樹木が植えられ、その時期には芳しい香りを放っていたこと。

○ 住込みの使用人がおり、客をもてなす術を身につけていたことなどである。

【仮説】松風館十勝は山田谷一帯に設置された

武田武美氏(菅茶山顕彰会元理事、郷土史家)は、

「松風館十勝は屋敷内だけに設けられたものではなく、山田谷一帯の風雅な地点に標識を設置したのではないかとする。例えば「魚樂梁」は山際を流れる山田川をせき止めて、養魚池にしていたのではないかなどである。

菅茶山顕彰会としてこの仮説を基に検討した結果を後述する。



山田川 松風館跡東側を流れる

二 河相君推と河相家について

(一) 河相君推（一七五七～一八一八）

宝暦七年備中国井原村旗本池田修理家の代官猪原幸右衛門の次男として生まれ、文政元年（一八一八）六十二歳で没する。名を保之、字は君推、通称を周次（治）郎、松風と号した。

西中條村河相重義の娘通知の夫として入婿となる。君推が河相家に入った頃が全盛期で、酒造業も営むなど大富豪であったという。「松風館」という客殿を建て、茶山や近隣の文人や僧侶などを招待し、詩会や月見の宴を催していた。茶山も「黄葉夕陽村舎」を訪ねてくる客と度々連れ立って訪問。君推も歓迎していたことが茶山日記や詩などに見える。

君推も和歌を能くする人物であったが、多くは残されていない。知り得た歌をあげる。

○象山献燈の背面に（『菅茶山ゆかりの拓本展』菅茶山記念館）

「やはらくる 光を古々尔 あらはへて

宇津須ともしひ 神も美そ那へ」

（やはらくる 光をここにあらわして うつすともしび神もみそなへ）

○君推の墓碑に（故武田武美氏遺稿）

「にほひくるかぜを枝折に和け入りて

とはゝやうめの花能やま佐登」

（にほいくる 風を枝折にわけ入りて とわばやうめの花の山里）

○『筆のすざび』中で「野寺の歌」として保之の和歌をとりあげている。

備後寶泉寺は野原の真ん中にある。この寺の歌会で詠んだその和歌は

「松幾木山と見るまで生そいて

野中の寺ぞふりまさりける」

（松の木が山と見間違える程生えていて野中の寺が、いつそう古刹に見える）

歌人がこの歌を見て「野中の寺は歌にしにくいものだ。この人以外にこれ程の歌を詠む人は誰もいないだろうと言った」と茶山は紹介している。

(二) 象山献燈の建立

松風館跡に現存する「象山献燈」は、君推の財力の一端を窺うことができる。この燈籠は高さが一三五cm、最大幅四十cmあり、「象山献燈」の刻銘は茶山の揮毫である。

南面 象山献燈

東面 文化丙子孟春

（文化十三年一月）

（二八一六年）

西面 山田谷講中

北面 河相君推の和歌

（前出 略）



君推の跡を継いだ滋之の墓には安政六年（一八五九）没とある。しかし、その後継者の墓は見つからない。

濱本鶴實氏は、『備後史談十八卷二号』に次のように記しているので紹介する。



河相家墓碑群

「土居の隠居に可愛い娘がおり、東中條村西中屋へ嫁し、子まであったが離縁となって帰り、甲山へ再嫁し、虎列拉^{コレラ}で急死し、隠居がその死骸を連れにいつて伝染し、コロリと死んで家は絶えた云々」

その後河相家がどうなったかは不明で、写真のように墓域に多くの墓が静かに建っているだけである。

平成十八年（二〇〇六）二月二日に行われた除幕の式典には、山南に嫁いだ三女組の子孫が参列していたことを特記しておく。

(五) 土居河相家墓域と河相君推の墓

河相家の墓は松風館跡から二百米ほど奥に入った山麓にある。（現在は道路端から入れる。）旧入口には六地藏が建ち、「南無阿弥陀仏 沙門慧充」と彫った大きな法界が立っている。

六地藏・法界を見ても河相家の繁栄が偲ばれる。

「慧充」とは乗如上人（湯田村寶泉寺）で、茶山と深い交流があり、後に高野山管長を務めた人物である。

君推の墓は河相家墓地の西奥にある。君推は文政元年（一八一八）七月二十日六十二歳で没している。茶山より十年早い死であった。その墓誌は茶山撰文で、君推の和歌が刻んである。（前出）

墓誌に刻まれた戒名には「成鏡院慈航智苧居士」とある。妻の墓は別にあり「教學院觀阿妙道大姉」、天保十三年（一八四二）十月十九日没とあり君推より二十二年長命であったことがわかる。

君推の戒名「成鏡院慈航智苧居士」の「英」は欠画となっている。「欠画」とは、天子又は貴人の名の漢字を書く時、憚ってその漢字の画を欠くこと。

いみなひでひと

君推の場合、後桃園天皇の諱英仁の「英」と同じなので「英」を欠画にしている。現在では、欠画など前世紀的なもので時代錯誤の感があるが、当時の思想を垣間見ることができる。なお、墓参のとき、欠画の字と当時の思想に思いを馳せていただきたい。

なお、欠画の詳細については、林多恵子氏の寄稿『菅茶山顕彰会会報第五号』にあるので参考にさせていただきたい。



河相君推墓碑

三 松風館（河相君推宅）で詠まれた詩

(一) 天明五年（一七八五）の作

天明五年三月十二日。西山拙齋、姫井仲明（桃源）頼千祺（杏坪）が茶山を訪ねる。前日には神辺龍泉寺に遊び、翌日河相君推宅を訪ねる。

河相君推宅即事分得雨字呈西山先生姫井仲明頼千祺

黄葉夕陽村舎詩 前二―十四

林亭三日東風怒

林亭三日 東風怒り

石榴曉鳴澗橋雨

石榴 曉に鳴る 澗橋の雨

轟雷一聲閃電光

轟雷 一聲 電光 閃めき

天宇如墨雲擁戸

天宇 墨の如く 雲 戸を擁す

昨遊半月烟水郷

昨は遊ぶ 半月 烟水の郷

春服朝朝飽和煦

春服 朝朝 和煦に飽き

晴川待渡楊柳汀

晴川渡るを待つ 楊柳の汀

夜館看棋桃花塢

夜館 棋を見る 桃花の塢

何事氣象斗凄慘

何事ぞ 氣象 斗 凄慘

松櫪掀舞山揺撼

松櫪 掀舞し 山 揺撼す

得非山靈有所索

山靈 索むる所 有りて

故作狡獪供遊覽

故 らに狡獪を作し 遊覽に供するに

非ざるを得んや

三公椽筆一代宗

三公 椽筆 一代の宗

好出奇語破鬼膽

好し 奇語を出して鬼胆を破らん

林亭 東屋など風流な離れ座敷。東風 春の風。石榴 岩がくぼんだところへ水がたまつた淵。澗 谷川、谷間。轟 大きな音が遠くまで響くこと。

天宇 全体を覆う大屋根。擁す 抱きかかえる。烟 けむり、もや。煦 あたためる。塢 土手、川土手、堤。櫪 くぬぎ。掀舞 掀は上げる、上がる。強い風が大きな木や幹を揺り動かす様。狡獪 ずるがしい。遊覽 見物して回ること。三公 ここでは、西山、姫井、頼の三人。椽筆 椽はたるきの事、たるきのような筆で書いた大文章（素晴らしくてかなわないような文）宗 本山、学問の深い大文人。奇語 珍しい発想で誰も思いつかない詩。

（大意）

林亭の三日、今日は東風が怒るが如く荒れて、曉方から大雨が降り出し谷川の橋下も賑やかである。雷が鳴り稲妻が閃いている。空一面に墨を流したような暗雲が立ち込め、家を覆っている。昨日は春着を着て終日和かに暖気を楽しんだ。晴れ晴れとした気持ちの良い柳の枝が揺れる川土手で渡し舟を待ったり、座敷で碁を打つのを見て楽しんだ。川土手には桃の花が咲き誇っている。どうしたのか、天気がちまちま悪くなり、風雨が松やくぬぎの幹や枝を揺り動かしている。これは山の神が私らが風流を求めて遊覧するのを邪魔しているのだ。三人のお方には、たるきのような大きな筆で書いたすばらしい詩心を詠んで聞かせてもらいたい。珍しい発想で誰も思いつかないような詩で暴れ神の度胆を抜いてやってもらいたい。

*（分得雨字） 詩を作る際、五言・七言なりの文字を皆で分け合つて、

それを韻字にして作る作詞法（茶山には「雨」という字が当たる。二行目で雨を入れている。

中秋飲河相君推宅 黄葉夕陽村舎詩前二一十八

一輪晴照幾神州

一輪の晴照 幾神州

匹馬孤閨終古愁

匹馬孤閨 終古の愁い

頼有雲林招小隱

頼いに雲林 少隱を招くに有り

聊將吟酌答中秋

聊か吟酌を將つて中秋に答えん

山空老木千章影

山空にして老木千章の影

天近明河萬里流

天近くして明河 万里に流る

偏喜朋交無變態

偏に喜ぶ 朋交 變態無きを

年年今夕此同遊

年年今夕 此に同遊せん

一輪 十五夜の円い月。神州 俗を超えた州(くに)、欲望を捨てた汚れない居場所。匹馬 一匹の馬。孤閨 ひとり寝のねや、茶山ことで、誰もあいてにしてくれない。終古 いつまでも。少穩 自分を卑しめて相手に言う言葉。聊 ほんのわずか。吟 詩を作り声に出して詠い披露する。山空 人氣のない山、ひっそりとした山。章 大きな木を数える数詞。明河 天の川。朋交 仲よくつきあう。

(大意)

十五夜の満月の光がいくつかの国々をあまねく照らしている。たった一匹の馬が誰にも相手にされることなく、晴れない思いを抱いて一生を終えるだろう。幸いにも私のような隠者を樹々に雲がかかるとようなお座敷に招いてもらえる。酒をいただきこの中秋の名月に負けないように詩を吟じよう。山はひっそりし、たくさんの老木が生えており、天の川がだんだん近づいてきて、

どこまでも続いている。昆虫のように姿を変えないで、主人の君推さんをはじめ皆さんと仲良くつきあってもらえることが、嬉しくてたまらない。だから、毎年中秋の名月の晩は、ここで月見の宴を楽しませてもらおう。

(二) 天明八年(一七八八)の作

この年二月下旬から三月上旬に西山拙齋・道光上人らと三原・西野梅林・仏通寺などに遊び、六月に『遊藝日記』の旅に出るので、その間に松風館を訪れて詠んだと考えられる詩が「松風館即事」(『黄葉夕陽村舎詩』前三一―三五)である。(前出 13頁)

(三) 寛政二年(一七九〇)の作

二月二十五日、西山拙齋と菅茶山は河相君推宅の詩会に招かれる。

中條山下宿	中條山下の宿	西山拙齋
歛宴也佳哉	歛宴 也佳き哉	
危緑松水浮	危緑 松水に浮び	
殘紅点花苔	殘紅 花苔に点ず	
烟霞禽向伴	烟霞 禽向に伴い	
膠漆陳雷擬	膠漆 陳雷に擬す	
不管春宵短	管せず 春宵の短きを	
夢醒亦呼杯	夢醒めても 亦杯を呼ぶ	

危 高い。烟霞 靄やかすみ。禽向 名山、大河を探勝する隠士。膠漆陳
雷 固く結びついた厚い友情。管 笛の総称。

(大意)

中條山下の松風館での楽しい宴、丈の高い緑の木が池に影を映し、散った
花びらが苔の上に落ちている。烟霞の中、庭園を散策する。それはまるで膠
漆のようにくっついて離れない友人と行動を共にしているようだ。笛など
吹かず夢のような短い春の宵から目覚めてまた杯を交わそう。

(四) 寛政四年(一七九二)の作

四月三日、頼春水が湯原温泉への湯治へ向かう途中茶山を訪ね来る。二人
は松風館に招かれる。

春水は「河相保之松風館同菅禮卿賦」の詩を詠む(前出)

【ちよつと休憩】 寛政四年は茶山にとつて大きな節目の年

この年八月、藩より五人扶持を給せられる。頼山陽撰の「茶山先生行状」
に「福山侯、林と詩を論ず。祭酒曰く、当今の詩家、まさに菅太中を以て魁
と為すべしと。侯、吏に命じて廉問せしめ、更につぶさに其の学行と兼ねて
茂状を得、始めて俸五口を賜う」とある。江戸にあつても茶山の名が聞こえ
ていたことを語るものであろう。

藩への出仕は病弱を理由に断っているが、翌年には藩命で福山で漢籍を講
釈している。また、茶山は学問と塾経営に専念するため、家業を弟恥庵(圭
二)に譲っている。

(五) 寛政五年(一七九三)の作

この年、茶山は父樗平の三周忌にあたり、喪が明けたので再び詩作を
始める。八月十五日、河相君推を松風館に訪ねて仲秋の月を賞した。

癸丑仲秋十五夕既午訪松風館酒間書感二首

黄葉夕陽村舎詩 前四―三

癸丑 仲秋十五夕 既午松風館を訪う。酒間に感を書す二首。

初昏猶作雨蕭蕭

初昏 猶雨 蕭蕭を作す

喜見狂雲漸自消

喜び見る 狂雲の漸く自から消ゆるを

獨坐無端思往昔

独り座して 端無くも往昔を思えば

七年曾已曠今宵

七年曾て已に今宵を曠くする

山當新霽清偏透

山は新霽に当りて 清偏に透る

月至殘更光轉饒

月は残に至りて 光り轉饒し

此際余能守單影

此の際 余能く單影を守らんや

泥行十里叩松寮

泥行十里 松寮を叩(たた)く

癸丑 寛政五年。既午 既に正午、昼の十二時。初昏 日没直後。蕭蕭

ものさびしい。狂雲雲が走りまわる様。曠せつかくの好機を逃すこと。

霽 晴れて清らかなさま。更 夜間を五つに分けて一更、二更・三更は夜

十二時から二時頃、残更は午前四時ころ。饒 豊かなこと。

單影 一つの影法師、一人で月を眺めること。泥行 だろんこ道を行くこと。

松寮 松風館。

(大意)

仲秋の名月を愛でようとやって来たのに、夕方になっても雨がしとしと降り続けている。やがて、うれしいことに行きかう雲が次第に自然と消えていった。一人座って思いかけず昔の仲秋の名月の事を思い起こすと、この七年ほどは、向こうから逃げてしまった。山を見ると黄昏時に降っていた雨もあがり、晴れあがって山の稜線が透き通って見えてきた。残更の時分になっていよいよ月が美しく輝き出した。この月を一人だけで見るのはもったいない。(月の美しさのわかる人と一緒に見たいものだ。)名月を見るために、泥道をはるばるやって来て松風館の門を叩いたのだから。

(六) 寛政七年(一七九五)の作

松風館	『黄葉夕陽村舎詩』前四―二十四
君家衡宇近吾廬	君が家の衡宇 吾が廬に近し
竹徑沙堤十里餘	竹徑 沙堤十里の余
綠酒尊前新畫軸	綠酒尊前 新画軸
鳥皮几上古農書	鳥皮 几上 古農書
垂蘿場圃鳥争果	垂蘿場圃 鳥果を争う
落葉池亭童喚魚	落葉池亭 童魚を喚ぶ
不妨事隙時來往	妨げず 事隙 時に來往するを
莫言多病故人疎	言う莫れ 多病 故人疎しと

衝宇 冠木門と家。廬 いえ、そまつな小屋。竹徑 竹林の中の小道。

沙堤 砂の堤、川の土手。綠酒 緑色の美酒。尊 酒だる。鳥皮几 孫登が杜甫に贈った鳥羔(鳥や子羊)の皮で包まれた机。これより鳥皮几の名が始まる。蘿 つた。場圃 畑、穀物を処理する所。事隙 争いごと。(大意)

松風館と私の家は近い。竹林や川の土手を辿って十里。ここには緑色の美味い酒だるや買ったばかりの書画、鳥皮几には古い農書が置いてある。つたが覆った取り入れ場では、鳥が穀物を争って食べている。落葉が浮かぶ池では子どもが魚を呼び寄せている。我が家で争いごとが起きて、時々訪ねることを嫌がらずに迎えてほしい。私が多病だからとて、親しい人も訪ねないとは言ってくれるなよ。

(七) 寛政九年(一七九七)の作

三月四日、京都下加茂社祠官梨木祐為が茶山を訪ねてくる。『備後史談第十四巻七・八号』によると、梨木祐為が残した神辺訪問の記録にある。

〔三月〕 四日 陰晴
 發福山、至神部驛、訪菅多仲、(從福山至神部、一里餘)詠物名かむのへ」
 この時詠んだ詩が『福山志料』巻十五「安那郡川北村」の部にもみられる。
 さらに、梨木祐為は数日を茶山と共に過ごしている。
 〔五日〕 快晴
 河相周次保之 別莊號松風館之由、請愚詠」とあり、句を詠む。
 「かよひくる琴の音ならてをのつから千代をしらふる宿の松風」

(八) 文化六年（一八〇九）の作

三月十四日、岡山藩藩士小原業夫と水田福州、山内梅巖が茶山を訪ねてくる。二十日、茶山は彼らを案内して松風館に遊んだ。

與業夫諸子訪松風館 『黄葉夕陽村舎詩』前八―十七	
槐雨纒収日正斜	槐 <small>かいう</small> 雨 <small>わずか</small> 纒 <small>わづか</small> に収まりて 日正に斜なり
麥寒將退鳥初譁	麥寒 <small>ばくかん</small> 將 <small>ま</small> に退かんとし 鳥初 <small>はつめ</small> めて 譁 <small>かまびす</small> し
徂春有脚追難得	徂春 <small>そしゅん</small> 脚有 <small>あし</small> りて 追 <small>お</small> うも得 <small>え</small> 難 <small>がた</small> し
導客山村探晩花	客 <small>きやく</small> を導 <small>も</small> いて 山村 晩花 <small>ばんか</small> を探 <small>もと</small> む

麥寒 麦も凍る寒さ。 徂春有脚 春が足早に去っていく。

(大意)

槐に降る雨も収まって、夕暮れ時になってきた。麦も凍るような寒さも通り過ぎ、鳥たちの声もかまびすしい。行く春は足早に去り、追うことも難しい。そんな中、小原業夫と諸氏を案内して中條の咲き遅れた花を求め探索しよう。

* 小原業夫 名は正修、字が業夫で梅坡と号した。備前岡山藩の世臣で詩や書画を善くした。のちに『黄葉夕陽村舎詩』の序文を書いた人物。水田福州、山内梅巖も岡山藩士であったらしい。

(九) 文化八年（一八一二） 頼山陽作

茶山日記に「文化七年三月二十八日、晴 與子成恵甫訪松風館」とある。この時山陽が詠んだ詩が『頼山陽全書 詩集卷七』に二首残されている。

茶山は文化六年（一八〇九）十二月、頼山陽を都講に迎える。外出時には、都講に迎えた子成（頼山陽）と弟子恵甫（佐谷恵甫、豊後の人）を度々伴にしたという。しかし、山陽は文化八年二月（閏）六日、茶山の期待を裏切り京都に出奔したので文化七年の作と考えられるが、頼山陽詩集には文化八年となっている。

松風館 二首 頼山陽詩集 文化八年作	
山窓剪燭好従容	山窓 燭 <small>き</small> を剪 <small>き</small> りて 従容 <small>しやうよう</small> 好 <small>よ</small> し
茶鼎鳴時雪意濃	茶鼎 <small>ちやてい</small> 鳴 <small>な</small> る時 雪意濃 <small>ゆきい</small> く
留宿今朝更乘興	宿 <small>しゆく</small> に留 <small>とど</small> まって今朝更 <small>けさ</small> に興 <small>きやう</small> に乗 <small>の</small> りて
起看六出壓簷峯	起 <small>お</small> きて 六 <small>む</small> つ <small>の</small> 出 <small>で</small> を看 <small>み</small> れば 簷峯 <small>えんほう</small> を <small>お</small> さ <small>え</small> る

従容 ゆつたりとくつろいでいる様。鼎・かなえ。壓 おさえる、おす。簷 ひさし。六 明け六つ、日の出三十分前。

(大意)

山の庵の窓から眺める景色は、灯りを消してみるとゆつたりとしている。茶釜が湯けむりをなびかせて鳴り、雪が段々強く降り出した。この景色がどう変化するかと興味が湧いて、朝六つ時（五〜六時）起きてみると、朝日が峰をおさえるように輝いていた。

松風館 (二)

愛客連宵敷引觥	客を愛し	連宵敷	觥を引く
雪為飛絮拂山楹	雪は為す	絮を飛ばし	山楹を払う
誰知道蘊多才技	誰が知らん	道蘊の才技の多きを	
絃撥聲交簷溜聲	絃撥の聲	簷溜の声に交じるを	

數 しきりに。觥 さかづき。絮 わた。楹 はしら。絃 琴など弦を張った樂器。撥 はねる、はじく。簷溜 のきから落ちる雨だれ。

(大意)

松風館の主人は來客をもてなし、毎晩杯を交わす。外は雪が綿を飛ばすように山門に降り積もっている。君推の才覚はあの道蘊のように豊かであり、琴を演ずる音が軒から落ちる雨だれと混じって聞こえてくる。

* 道蘊 二階堂貞藤、法名が道蘊。鎌倉幕府末期の武将。和歌・儒学に通じ、当時幕府随一の賢才といわれ、幕府滅亡後も才学を惜しまれ、許されて建武政府の役人になったが、後、謀反を疑われ処刑された。作庭師としても著名。山陽は君推を道蘊に喩えている。

* 佐谷惠甫 豊後筑前秋月藩医箕浦東伯の子 生没年は不明
文化六年末(一八〇九)から文化八年(一八一二)閏二月まで一年余にわたり塾生。「送佐谷惠甫歸秋月」の詩(『黄葉夕陽村舎詩』後三十三)が載せられている。

(十) 菅茶山ゆかりの中条地図



茶山が中條へ辿る道は、二通りの道があったと推定される。

① 丁屋道

廉塾〜掛の橋(大仙坊橋)〜豊久保〜丁屋(中陣池)〜山田谷
遍照寺など

② 箱田道

廉塾〜掛の橋(大仙坊橋)〜秋丸〜箱田(箱田池)〜山田谷
遍照寺など